

第3回「泉大津市オリアム随筆賞」

【泉大津市長賞】

母との思い出

中村紀子・泉大津市

リンキングミシンの音が聞こえる。母の踏むミシンの音である。

「ただいま。」

学校から帰ってきた私は、仕事をする母のそばで、何時間でもその日の出来事を話した。友達の事、先生のこと、おいしかった給食のこと、テストの事、喧嘩をした事、母にはどんなことでも話せた。

母はミシンを踏みながらも、私の話を聞いて相槌を打ったり、頷いたり、時には一緒に悩んでくれたりした。

話を聞きながらも母の手は休みなく動き、次から次へと何枚ものセーターを仕上げている。話を聞きながら母の手は休みなく動き、次から次へと何枚ものセーターを仕上げている。

母の仕事はセーターの身頃と衿とを一目の狂いもなく縫い合わせるというリンキングミシンの仕事である。

無数にあるミシンの針に、セーターの身頃の目と、衿と目を、一目ずつ通して縫い合わせるという、正に職人技である。

クールネック、

ブイネック、

ハイネック、

タートルネック、

ヘンリーネック、

どんな衿でも、どんなに細かなゲージの目であっても、母の手にかかると、あつという間に仕上がってしまう。

母の手は魔法の手である。

ピアノを弾く人が、いちいち鍵盤を見なくても弾けるように、ハープを奏する人も又それであるように。

母はリンキングミシンの無数の針の位置をその指の感触で覚えていたのだと思う。

そんな仕事をする母のそばで、私は育った。

母と話をしながら、セーターを裏返したり、たたんだり、捨て糸と言われるいらぬ糸をほどこいたり、ちよつとしたお手伝いをして褒めてもらう事がとても嬉しかった。

家には毎日、織屋さんが来ては、セーターを運んでいた。

ライトバンの止まる音。ドアの開く音。

「こんにちは、まいど。」

「ありがとう。」

「御苦労さま。」

そんなやり取りの毎日があった。

母の老眼がすすみ、セーターの一目が見えにくくなって仕事を辞めるまで、母だけでなく、私自身もたくさんの人と出会う機会が来た。

泉大津は毛布の街、セーターの街、ニットの街である。毛布はもちろんの事、たった一枚のセーターが出来るまでも、たくさんの人の手を介す。

撚糸、紡績、染色、ミシン、アイロン、検品、分業の街である。

その仕事の一つの担い手が母であった。

近年、リンキングミシンのできる人が少なくなってきているという。

難しい技術だと思う。根気がなくてはなかなか手に入れる事の出来ない技術だと思う。

到底私には出来ない事である。

けれど、母がその技術を手に入れてくれたからこそ、私はいつも母のそばで寂しさとは無縁の生活ができた。

楽しいときは、一緒に声をあげて笑い、悲しいときは、励ましてくれて、悔しいときは、黙って聞いて頷いてくれて。

私はミシンを踏む母の横顔を見て、そしてミシンの音を聞きながら、火照った感情を冷ましていく事もできた。

毎日訪れる織屋さんとの出会いの中で、自然に人との接し方を覚えた。

私は、結婚数年後にこの市に帰ってきた。

やはり泉大津市はいい。ガチャガチャとなっている工場の音。シューシューとなっているプレス工場の音。思い出がよみがえる。

様々な理由で廃業に至った工場もある一方で、新しく近代的に建てられた工場や会社もある。

泉大津駅の再開発、市内の道路の拡張工事、もうすぐ完成する松の浜駅、街は新しく姿を変えた。そうして新しく近代的な繊維の街となった。

私には分からないが、もしかすると、時代が変わり、リンキングミシンも形が変わっているのかもしれない。またもしかすると、母のような職人技が無くても、コンピューターを使って、縫製が出来るようになっていいるのかもしれない。

それでも、まだまだ泉大津には小さな町工場がたくさん残っている。そしてそれぞれが昔ながらの分業を担っている。

きつと、私がかつてそうだったように、母親や父親の仕事を見て育てている子供達がいる事と思う。いや、いてほしい。

そう、今もこんな声が聞こえる気がする。

「ただいま。」

「おかえり。」